

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡41

平成22年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第132次発掘調査区全景(東より)



第132次発掘調査出土 彩色の残る石造物

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡41

平成22年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

昭和46年(1971)7月に一乗谷朝倉氏遺跡が特別史跡の指定を受けてから40年を経過しました。平成16年には豪雨による大きな被害もありましたが、発掘調査・環境整備事業を継続しており、その面積はおおよそ17ヘクタールに及んでいます。

本書は平成22年度(2010)の発掘調査・環境整備の概要報告です。

発掘調査は、一乗谷の入り口に所在する西山光照寺跡を対象としたものです。西山光照寺跡は城戸の外に所在する大規模な寺院跡で、寺域の南半部は平成6・7年度に調査を実施しています。また、この寺は一乗谷において石仏造立の担い手であった天台宗真盛派の中核寺院であったこと、大型の石仏が林立することでも知られ、多くの見学者が訪れています。今回の調査区では、大規模な建物遺構の一部や敷地境界の石垣などを検出しました。また、多くの石仏も出土しています。なお、調査は平成23年度も引き続いて実施しました。

環境整備は、平成19年度に発掘調査を実施し、刀装具の土製文様型が多数出土した調査区を対象地として行いました。遺構の残存状況や諏訪館跡庭園の直下であり、遺跡中心部東岸の出発点でもあることなどから、遺構保護と広場造成に重きを置いたものとしています。当該地区の特徴を知っていただくため、原寸大の写真を用いた説明板を設置しました。

諸事業の実施に際し、ご協力・ご支援をいただきました文化庁、地元の皆様を始とする関係各位に感謝申し上げますとともに、今後ともより一層のご指導・ご鞭撻のほど、お願いいたします。

平成24年3月

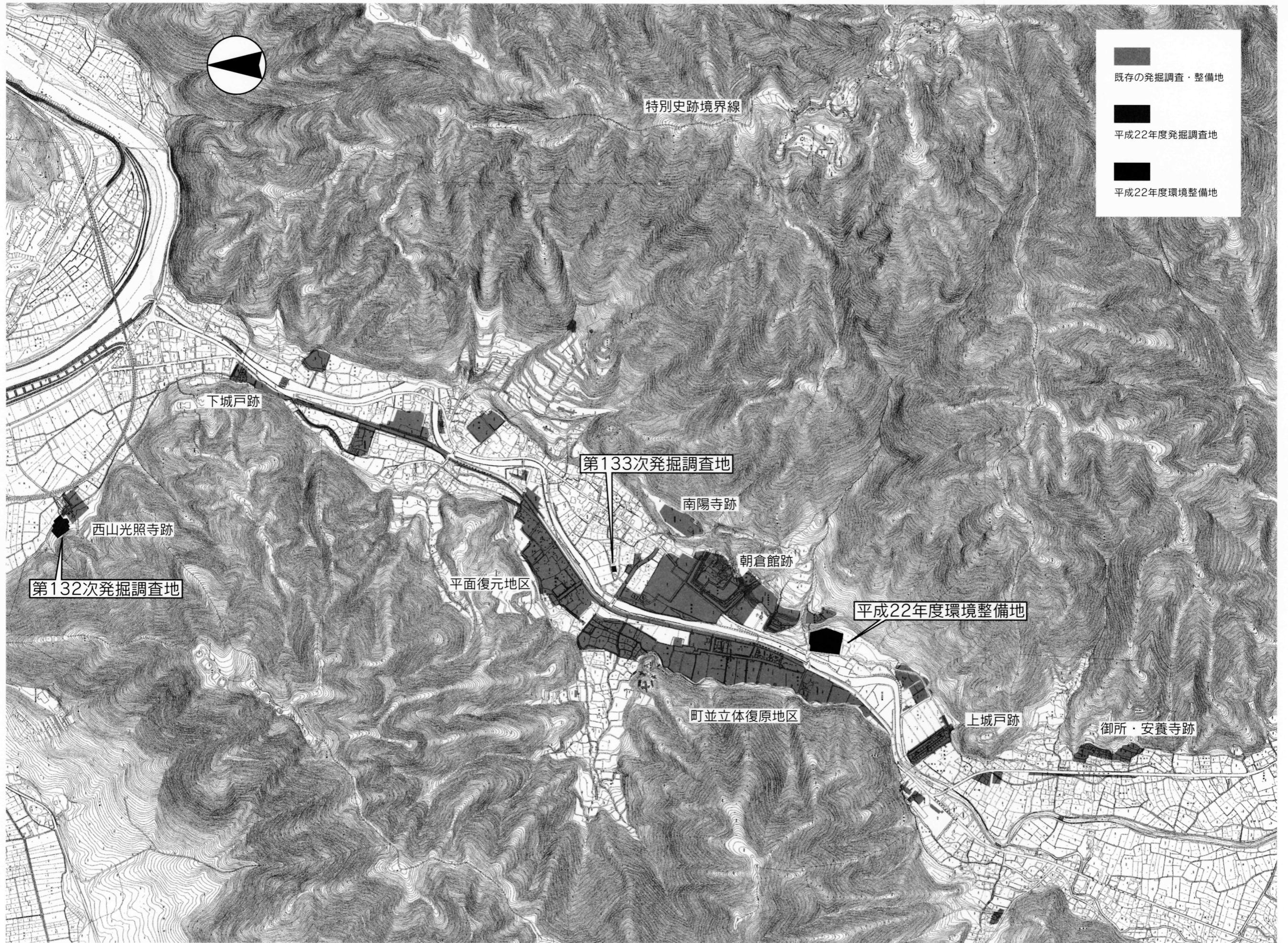
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 吉岡泰英

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成22年度に実施した国庫補助事業による発掘調査及び環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備事業中期第3次10ヵ年計画（新10ヵ年計画）」の6年次にあたる。本書は、第132次・第133次発掘調査の成果、第124次発掘調査区（米津）環境整備の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者などが各項目を執筆し、項目末に文責を記した。
4. 遺構番号の頭に付した略記号は以下のとおりである。
SA：土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘立柱など）、SD：溝・濠、SE：井戸、SK：土坑（柱穴・埋甕等）、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

目 次

1. 平成22年度の事業概要	3
2. 第132次発掘調査	6
遺 構	6
遺 物	13
3. 第133次発掘調査	25
4. 環境整備	28
第1図 平成22年度発掘調査・環境整備位置図	第11図 第132次発掘調査出土遺物（石造物）
第2図 第132次発掘調査位置図	第12図 第132次発掘調査出土遺物（石造物）
第3図 平成22年度環境整備位置図	第13図 第132次発掘調査出土遺物（石造物等）
第4図 第132次発掘調査遺構全体図	第14図 第133次発掘調査位置図
第5図 第132次調査区南東側遺構詳細図	第15図 第133次発掘調査遺構全体図・土層断面図
第6図 第132次調査区南東側石垣立面図	第16図 第124次調査区（米津）整備工事平面図
第7図 第132次発掘調査出土遺物	第17図 説明板（炉跡）詳細図
第8図 第132次発掘調査出土遺物	第18図 河川排水工詳細図
第9図 第132次発掘調査出土遺物（石造物）	
第10図 第132次発掘調査出土遺物（石造物）	
表1 平成22年度事業概要一覧	表3 第132次発掘調査出土石仏・石塔銘文一覧
表2 第132次発掘調査出土遺物一覧	表4 第133次発掘調査出土遺物一覧
写真図版 第132次発掘調査遺構	PL.1～7
第132次発掘調査出土遺物	PL.8～12
第133次発掘調査遺構	PL.13
環境整備	PL.14～15



第1図 平成22年度発掘調査・環境整備位置図

1. 平成22年度の事業概要（第1～3図）

平成22年度は中期第3次10ヵ年計画の6年次目にあたる。本年度は下記表1のように発掘調査3件と環境整備1件を実施した。

発掘調査は、まず国庫補助事業の計画調査として第132次調査を実施した。下城戸跡の北西に位置し、笏谷石で造られた大きな石仏群が良く残ることで知られた西山光照寺跡の発掘調査である。ここはJR一乗谷駅の西隣で、一乗谷をめぐる遊歩道の下城戸跡側の起点でもあることから最初に訪れる見学者もみられ、一乗谷の顔とも言える。過去の発掘及び整備は、平成6～10年度に行われ、寺跡の南側の約半分が調査・整備された。しかし南側部分を調査するのみでは寺跡全体の構造が明らかでなかったため、この解明と整備の充実に目的に、平成22～23年度の2ヵ年で寺跡北側の約2,300㎡を発掘調査することになった。平成22年度は、この内の南側部分約1,500㎡の調査を実施した。

次に、個人宅の現状変更に伴う調査として第133次調査を実施した。ここは朝倉館跡の唐門から北に約200mの一乗谷川右岸にある。

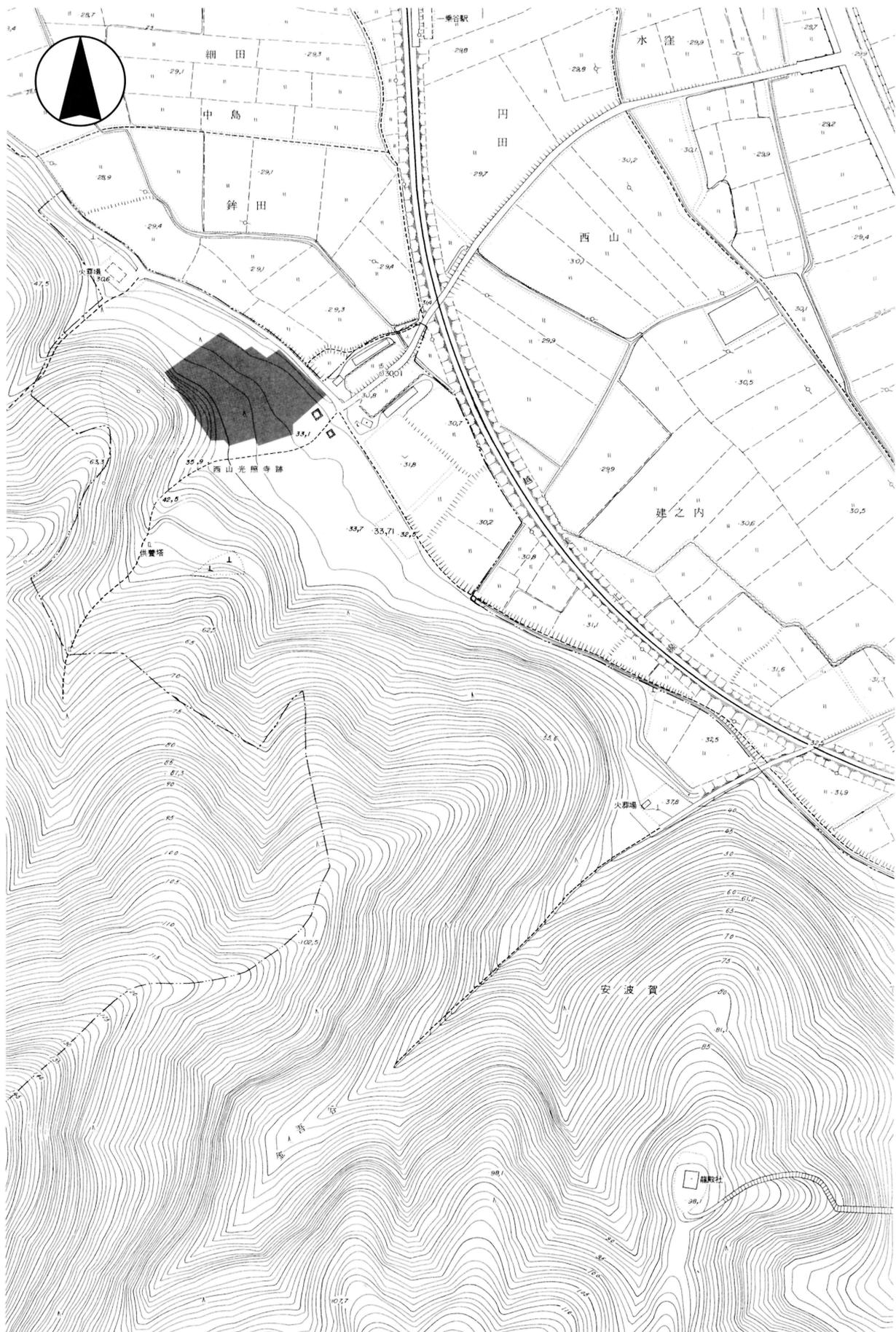
なお、国庫補助事業以外に県土木事業の一乗谷川河川改修事業に伴う試掘として第134次調査を実施した。藤兵衛川原を中心に、米津から上城戸地係にかけての一乗谷川両岸を対象に、旧河川の広がりや遺構面の遺存状態を確認し、掘削工事の可能範囲をあらかじめ調べる目的で行った。

環境整備は、平成19年度に発掘調査した第124次調査区を対象に実施した。ここは諏訪館跡庭園の麓に位置し、町並立体復原地区から朝倉館跡へ向かう主要な散策ルートに面しており、遺跡の景観形成上重要な場所であるため、平成22年度より2ヵ年で周辺一帯を含めた整備を行う。平成22年度事業では調査地を中心に検出遺構を保護の上、屋敷割の表現と周囲の景観に調和した修景整備を実施した。

（楯部正典）

表1 平成22年度事業概要一覧

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第132次	福井市安波賀中島町 字赤旗	平成22年5月25日～ 平成23年3月15日	1,500㎡	中期第3次10ヵ年計画に基づき整備
第133次	福井市城戸ノ内町字庄角	平成22年4月14日～ 平成22年5月14日	40㎡	現状変更に伴う調査
第134次	福井市城戸ノ内町 字藤兵衛川原・上城戸他	平成22年4月6日～ 平成22年4月30日	222㎡	河川改修工事のための試掘調査(福井土木事業) 『紀要2010』に別記
工事名	環境整備箇所	整備期間	面積	整備事由
第124次調査区 (米津)整備工事	福井市城戸ノ内町 字米津	平成22年10月28日～ 平成23年3月25日	3,700㎡	中期第3次10ヵ年計画に基づき整備



第2図 第132次発掘調査位置図(S=1/2000)



第3図 平成22年度環境整備位置図(S=1/2000)

2. 第132次発掘調査

下城戸跡の北西約500mにある西山光照寺跡の調査である。過去の発掘調査は平成6・7年度(第86・87・90次)に寺院跡の南半(約3,200㎡)を行っており、地下式倉庫跡、巨石積みの石垣、入口階段などの遺構を検出し、平成8～10年度に環境整備を行っている。

残る寺院跡の北半(約2,300㎡)は、大きく上段と下段の平坦面に分かれる。平成22年度は、当初、排土置場(約300㎡)を除く約2,000㎡を調査する計画であった。しかし上段の山裾側や上・下段境の斜面などで土砂の堆積がかなり多かったため、調査面積を約1,500㎡に減らし、平成22・23年度の2カ年で実施する計画とした。

調査地の西側は丘陵で、山裾を境に調査区を設定した。山裾の東にはまず南北約70m、東西約35～14mの上段の平坦面が広がり、その東側約2m下に、下段の平坦面がみられる。しかし下段は農道がすぐ東を通っているため、調査可能な幅は約5mであった。

調査の結果、上段の山際付近では火災による焼土面が良好に残り、礎石等の遺構が比較的良く遺存していた。しかし上段の中心から東側では後世の削平により礎石等の遺構の遺存が悪く、結果として建物全体の形までは明確にできなかった。上・下段境の斜面ではもともと石垣の存在を予測していたが、今回の調査によって石垣の位置・形状が概ね明らかとなり、寺院跡全体の区画の解明に役立つ成果となった。

遺構（第4～6図、PL.1～7）

SD6421 平坦部北側の敷地を区画する石組溝である。この溝の主軸方位はN53°Eで、溝北側のSB6426建物跡と一致する。溝幅は石組内法で0.25m～0.5m、深さは0.4～0.6mを測る。溝の下流側(東側)では、後世の削平等により石組の失われた所が多い。溝は東側石垣下でSD6450に続くとみられる。

SZ6422 SD6421に付属する扁平な自然石を蓋にした暗渠で、北側への入口となった場所と考えられる。この部分の溝幅は0.25～0.3mで、蓋石は東西約2.8mの長さに5石を検出したが、東端の石は溝に転落しかけていたので調査時に取り外した。

SX6423 4.8m×2.3mの隅丸方形の土坑で、深さ約0.6m～0.3m。近世まで存続したSD6421を壊しており、明らかに近世以後の攪乱坑である。

SV6424 SD6421の南壁の石組で、SB6425がこの造成面上に築かれる。この石組の東端の石は、幅1.3m、高さ0.55mとかなり大きく、他にも幅0.7～1.0mの石が一定間隔で置かれている。これらの石の表面は被熱で赤く変色した部分がみられた。

SB6425 SV6424より約1.6m南側で、SV6424と平行し礎石の抜き取り痕と考えられるピット4基を検出した。ピットは径0.3～0.5m、深さ約0.1mで、炭・焼土層が堆積していた。

各ピット間の距離は東から順に約0.9m、1.1m、0.9mである。

SB6426 平行する2列の礎石を基本とした礎石建物で、四隅が検出できなかったため建物の形状・規模は不明。建物南面のラインでは礎石が西から約3.9m間隔で2石並び、その東約4.0mにも礎石の抜き取り痕がみられた。このラインの北側約3.8mで礎石列があり、礎石は西から約1.9m、2.0m、5.7m間隔で並ぶ。そのうち西から2番目の礎石には柱を据える目印の「十」字線が刻まれていた。

SX6427 方形の石組みで、北辺の石は失われているが底面の痕跡から石組内法が南北約1.2m、東西約0.9mと推定された。南辺は自然石を2段積みに築き、東西両辺は板状に加工した笏谷石を据えている。炉跡の可能性が考えられるが、炭・焼土は堆積していなかった。

SE6428 石組みの崩落した円形の井戸。まず地表面で大きな窪みを検出し、地表より約3.2m下(標高約29.5m)で井戸の石組みの残存を確認した。なお、その下の掘り下げは安全性を考慮して行わなかった。

SB6429 SB6426北側の礎石建物で、SB6426と一続きの建物の可能性がある。建物西側で縁の東石と考えられる小振りな石が並ぶ。建物の北面では比較的大きな礎石が並び、これらを基準に、南北21.4m、東西10.6mの大きな建物が想定できる。 **大規模建物**

SX6430 SB6426、SB6429の礎石等より約5cm低い位置で検出した石列。この付近には火災による焼土面が広がり、石列はこれより下に存在することは明らかである。しかし建物と石列の軸方向が同じであることから、建物に伴う石列が火災に遭うまでに埋まった可能性も考えられる。

SX6431 SB6429西面東石より約0.5m西に平行に並ぶ石列。

SD6432 SX6431西側の溝で溝の上層に炭・焼土層が堆積していた。もともと山際の排水用として掘られた溝が、火災までの間に徐々に埋没していったものと考えられる。

SX6433 炭・焼土混じりの土で埋まった不整形な土坑で、恐らく火災後、何らかの構築物を抜き取るなどの目的で掘られた可能性が考えられる。

SK6434 石造物が一括で多数出土した隅丸方形の土坑で、一辺約1.1mを測る。土坑上面に一石五輪塔を線刻した板碑片(第12図88、巻頭写真)が裏返して出土し、その下で一石五輪塔他の石造物がまとまって出土した。なお石造物には風化が殆ど無く、かなり古い時期に集めて埋められた可能性が考えられる。 **石造物を埋めた土坑**

SK6435~6439 径0.8~1.5mの土坑群で、5基検出した。SK6435、SK6436では越前焼の甕片が比較的多く出土し、大甕を据えるための穴の可能性が考えられる。 **土師皿一括出土ピット**

SX6440 土師皿が横向きに重なった状態で出土した小さなピット。土師皿は径約10cmのほぼ同じ大きさの皿が20個体以上出土した。

SX6441 東西約1.5m、南北0.5mの長方形の石組とその南側には集石が広がる。性格は不明だが、溝の一部の深い部分のみが破壊されずに残った可能性が考えられる。

SX6442 SB6429北側の西半にある石敷きで、東西約5.1m、幅約0.8mの規模である。西端は南北溝SD6443につながり、溝であった部分を埋めて石を敷いたと考えられる。

SD6443・SZ6444 山際に沿って検出した南北の溝で、北側は次年度の調査区に延びる。溝の底面では地山の岩盤を掘削した部分もみられた。自然石を蓋にした暗渠(SZ6444)がみられ、そこが通路になっていたと考えられる。

SX6445 SX6442の東側にある石列で、東西長約5.3mを検出した。SB6429の礎石やSX6442の石敷面より低い位置になることから、検出当初は下層の遺構と考えた。しかしトレンチ断面の精査からSB6429の礎石と同一面より掘られていることが明らかになった。恐らくSD6443と一連の溝でSB6429と同時期に築かれたものが、石敷を築く際かその前に埋められた可能性が考えられる。

SX6446 上・下段斜面の石垣を東側に突出させた方形の突出部である。東西約4.6m、南北約3.8mの規模で、軸方向は斜面石垣SV6447に対して垂直に接していないが、上段の建物群やSD6421には一致する方向である。

石垣 SV6447 上・下段斜面の石垣である。段の比高差は約2.3mで、石垣は下から約1mが良く残り、石垣の上部は崩れ落ちた可能性が考えられる。石の大きさが長径約1.2mと大きな石も部分的に使われている。下から一石目の配置の仕方を見ると、大きな石を2～3m間隔で据え、間に小振りな石を積んだ状況がみられる。

SD6448 上段のSD6421から続くと考えられる溝である。溝は上段の突出に伴う石垣の間の約1.5mの窪みの中に存在するが、溝の落ち込みは幅約0.8mで、北側の石垣寄りに位置している。これに対し南側の石垣は、溝の南壁とみられる石とは位置がずれており、また南側の石垣の積み方が粗雑であることから、南側の石垣は後世の積み直しの可能性が考えられる。

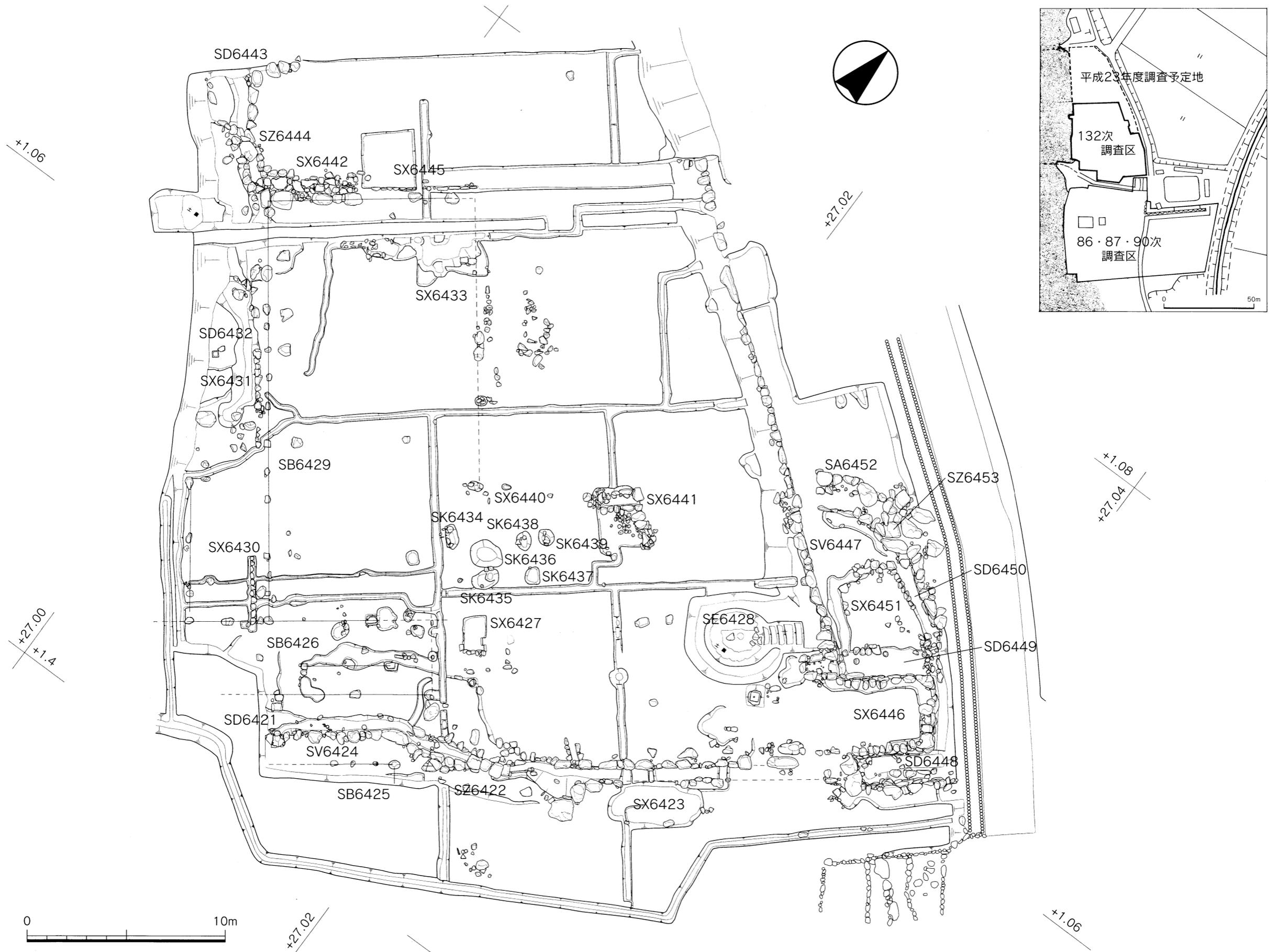
SD6449 SX6446の北面直下で検出された幅約1m、深さ約0.2mの浅い溝である。溝の北側には1段の石列が部分的に残り、その石列の並びと同列上に径約0.2～0.3mの柱穴とみられるピットが3基見つかっている。西側の斜面石垣の上には溝の一部と考えられる石列が残るので、上段から落とした水を受ける溝と考えられた。石垣の直下の溝の縁で石仏の台座が1基据えられた状態で見つかった。

SD6450 切り合い関係からSD6449より後に築かれたとみられる溝である。遺物は少なく時期は不明だが、近世以降の遺物は全く出土していない。

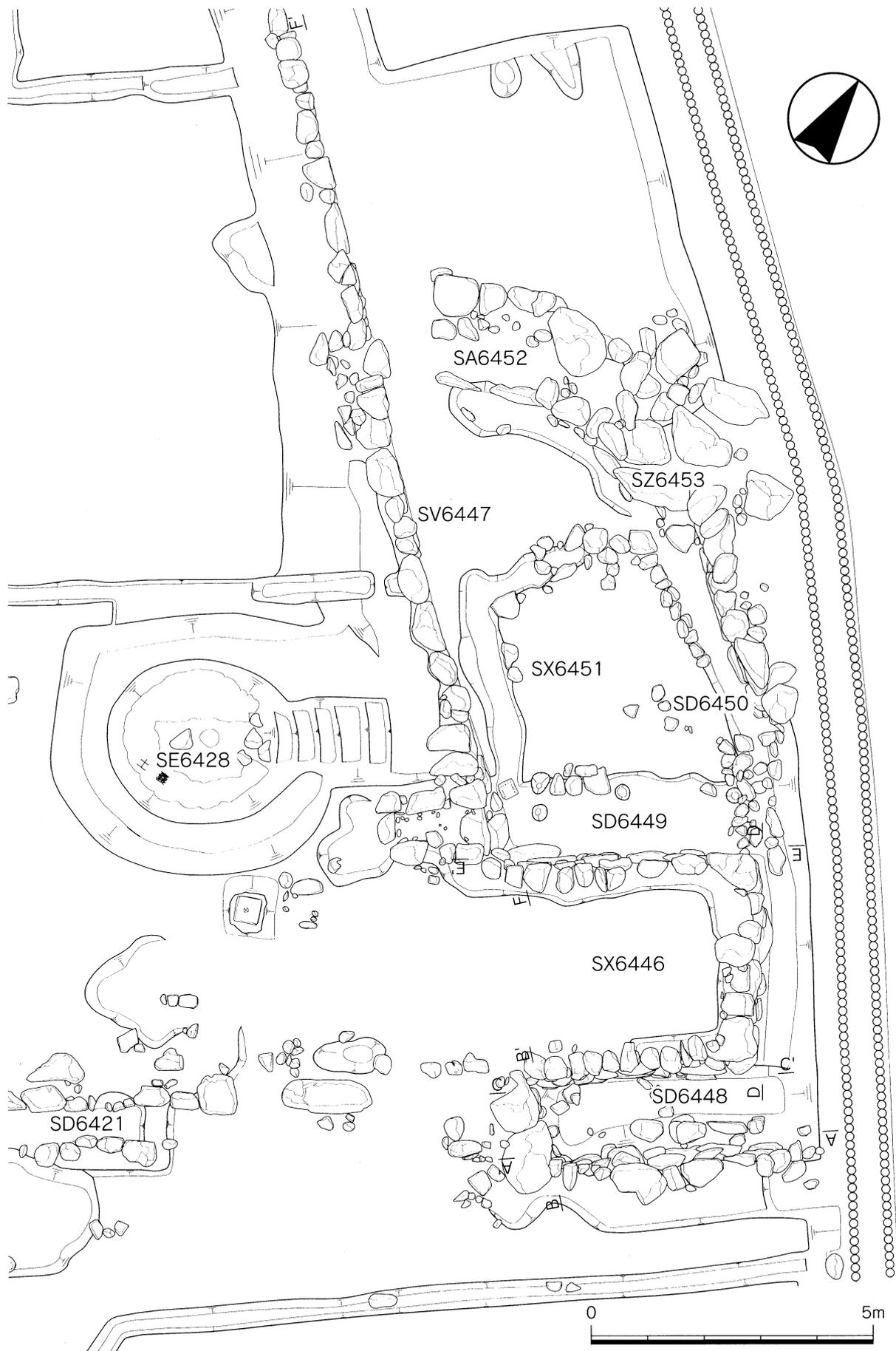
SX6451 SV6447と同一軸方向に西から北側に折れる浅い溝状の遺構で、石列を抜き取った痕の可能性が考えられる。北東角の石とSD6450西側肩部にある石は上面が平らで、礎石の可能性も考えられるが、建物は明確にできなかった。

SA6452・SZ6453 両側に石垣をもつ土塁状の遺構でその性格については不明である。南北の幅約1.8mで、やや曲線的な形である。SV6447よりも少し高い地面に基底石を据えており、これよりは新しい遺構である。内部に暗渠SZ6453が築かれ、SD6450がここを抜けて北側の出口で東に折れている。

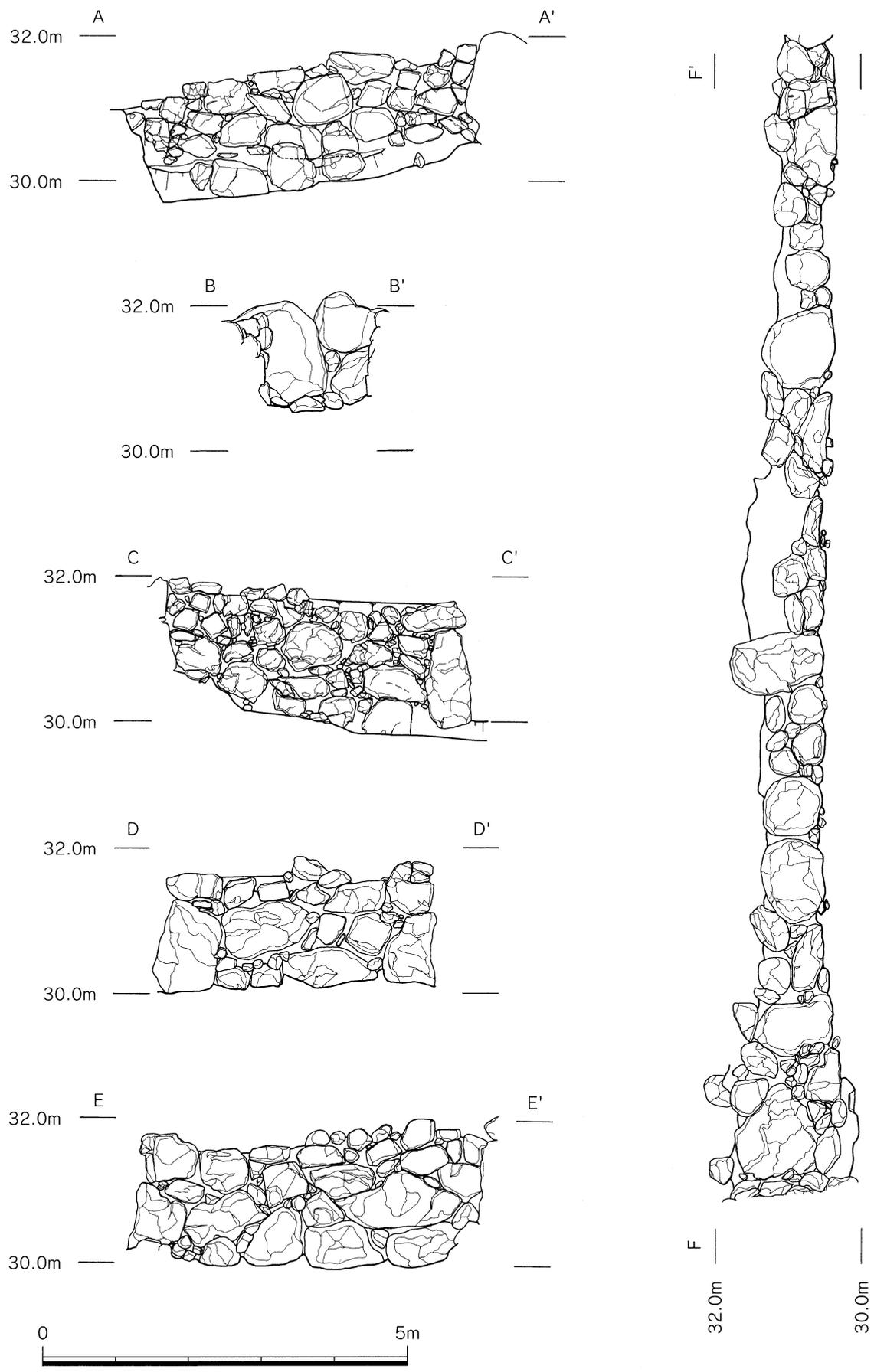
(櫛部正典)



第4図 第132次発掘調査遺構全体図(S=1/200)



第5図 第132次調査区南東側遺構詳細図(S=1/100)



第6図 第132次調査区南東側石垣立面図(S=1/80)

遺物（第7～13図、PL.8～12）

第132次発掘調査で出土した遺物の総数は、23,369点で、遺物の種類別の内訳は表2の示すとおりである。

出土状況をみると、上段の平坦面は後世の削平の影響もあり出土量は少ないが、下段では上段側より落とされたとみられる炭・焼土層を中心に、遺物が多量に出土した点があげられる。また西側の山腹に大規模な中世墓が存在することから、石仏・一石五輪塔・板碑他の石造物が多量に出土し、当調査区の最も特徴的な遺物といえる。近世・近代の陶磁器

表2 第132次発掘調査出土遺物一覧

器種			点数	%	器種			点数	%	器種			点数	%
日本製陶器	越前焼	甕	6,380	38.14%	中国製陶磁器	青磁	碗	114	1.47%	金属製品	釘	151	1.42%	
		壺	1,101				皿	141			鏝	1		
		鉢	223				鉢	13			火箸	1		
		播鉢	1,028				盤	13			小柄	4		
		皿	22				壺	10			引手金具	1		
		皿卸皿	4				香炉	36			蓋	2		
		桶	129				瓶	5			脚	1		
		花生	3				花生	2			銅製品片	35		
		葉研	1				その他	10			銅銭	54		
		その他	22				計	344			鉄塊	1		
	計	8,913	計	10	その他	81								
	土師質	皿	9,420	40.45%	白磁	碗	10	3.54%	小計	332				
		丸皿	4			皿	798		石製品	盤	147	6.63%		
		土釜	10			坏	19			水盤	8			
		壺	7			その他	1			鉢	116			
		土錘	1			計	828			火鉢	1			
		その他	11			計	109			バンドコ	330			
	計	9,453	碗	109	風炉	59								
	鉄釉	碗	217	1.54%	染付	皿	424	2.36%	炉	1				
		皿	6			坏	12		炉壇石	8				
壺		105	鉢			2	白		39					
鉢		5	盤			1	茶臼		2					
桶		11	壺			2	硯		62					
瓶		3	その他			2	砥石		48					
香炉		1	計			552	玉石		11					
茶入		2	その他			青白磁	5		石英	1				
水滴		1				壺	35		石仏	155				
蓋		6				華南彩釉	3		一石五輪塔	108				
その他	3	不明	4	組合五輪塔	6									
計	360	計	47	宝篋印塔	4									
灰釉	碗	18	0.85%	朝鮮製	碗	123	0.59%	板碑	40					
	皿	166			皿	3		台座	71					
	壺	5			壺	10		石龕	15					
	鉢	2			その他	3		花立	2					
	香炉	3			小計	139		石造物庇	14					
	花生	2			輸入陶磁器合計	碗		123	不明石造物	18				
その他	2	皿	3	板石		57								
計	198	計	1,910	8.17%	その他	226								
瓦質	風炉	1	0.19%	木製品	漆膜	1	0.01%	小計	1549					
	香炉	20			柱根	1								
	その他	23			小計	2								
計	44	国産他	信楽壺	71	その他	骨	1	0.01%						
国産他	備前		3	壁土		18								
	須恵器		11	ガラス製品		1								
	近世		451	勾玉		1								
	その他		49	不明		2								
	計		585	小計		23								
小計	19,553	83.67%	総合計	23,369										

類が比較的多く出土しているが、これらは区画溝SD6421より南側でまとまって出土し、北側ではほとんど出土しなかった。出土遺物の内容では朝鮮製のソバ茶碗が量的に多いことが、前回の86・87・90次調査でも同様の結果であったので、西山光照寺跡の特色として注目される。

以下、石造物を除く主な遺物(陶磁器・金属製品・石製品)を第7・8図、石造物(大型の石製品1点含む)を第9～13図で示した。

土師質土器 (1～3)は小ピット(SX6440)出土の皿。大きざ1/2以上の個体が22点重なって出土し、同時期に使用・廃棄されたと考えられる一括性の高い資料である。これらは口径9.6～10.3cmのほぼ同じ大きさの皿で器形もよく似ている。しかし口縁端部の尖り方、体部や見込み外縁部の稜などの細部の特徴では、ばらつきがある。図示した3点はほぼ完形品である。(1)は口径9.8cm、器高2.4cm、橙褐色の色調で、内面体部の回しナデは中間に稜があり2回である。(2)は口径9.8cm、器高2.4cm、橙褐色の色調で、内面体部のナデは2段あり、その境目から外に開く器形となり、外面体部のナデ境が鋭利で深い直線状をしている。(3)は口径10.1cm、器高2.2cm、橙褐色の色調で、器壁はやや薄めである。口縁先端が内尖りになり、見込み外縁にごく浅いが窪みがめぐり、その内側がやや盛り上がる。1度目のナデで見込みに窪みが付き、2度目のナデで口縁端部をつまみナデ仕上げしたとみられる。

越前焼 (12・13)は小形の壺。(12)は口径9.4cm。肩部に三角と円の連結したヘラ記号が付く。(13)は山裾の斜面崩落土層より出土したことから、斜面上の中世墓に納められた蔵骨器の可能性が高い。口径9.2cm、胴部最大径17.0cm、灰色の色調である。口縁上端が平らで面をもつ。口頸部の上・下2か所にヘラ状の工具を刺し込んで回したような窪みが付く。肩部にヘラ記号がある。(14)は卸皿で、口径16.6cm、器高2.1cm。(15)は播鉢で、口径24.4cm、高さ7.9cm。摺目は10本単位で、体部は反時計回りで下から上に、底部は3回で施されている。(28)は薬研の摺り具で、直径14.2cm、厚さ2.6cmの円盤状をなす。木製の軸棒を差し込む孔は方形で、一辺1.7cmを測る。一乗谷で出土した薬研は、今回の資料で12点、9次調査区目となる。

越前焼薬研

瀬戸・美濃焼 (4～6)は鉄釉碗。(4)は口径8.4cm、器高4.3cm、黒色の釉調で、体部下半から高台は鉄洪が塗られる。(5)は口径12.0cm、器高6.4cmで、釉調は茶褐色と白黄色のまだらを呈し、体部下半から高台に鉄洪が塗られる。(6)は口径12.8cm、器高6.5cmで黒色の釉調で、体部下半から高台は露胎である。(7)は鉄釉把手付片口鉢で、上段のSK6438・6439付近の遺構面直上で出土。口径12.2cm、器高4.9cmを測りほぼ完形である。釉調は黒色にやや茶褐色のまだらで、体部下半から高台にかけては鉄洪が塗られる。(8)は鉄釉の蓋で、口径7.0cm、受部最大径9.5cm、器高2.15cm、つまみ径1.6cm、同高0.75cmを測る。(9)は小形の鉄釉瓶である。口縁部は欠損し残存高8.0cm、底径5.0cm。(10)は小形の灰釉香炉で口径6.0cm、器高3.0cm。(11)は鉄釉香炉で、口径14.0cm。

青磁 (16)は碗。口径12.0cm、器高7.0cmで、外面体部に線描蓮弁文、内面体部下半に円弧状の文様が施される。(17)は輪花皿で、口径9.7cm、器高2.2cm。(18)は皿で、口径13.3cm、

器高3.6cm、器壁が厚めである。(19)は皿で口径26.1cm、器高5.0cm。高台内は蛇目状に釉が剥ぎ取られる。(20)は香炉で、口径9.2cm、残存高5.0cm、体部に多数の横筋がめぐる。

染付 (21)は坏で口径6.0cm、器高4.0cm。(22)は碗で、口径13.6cm、器高6.5cm。(23)は皿で口径9.6cm、器高2.2cm。(24・25)は内面にアラベスク文を施す皿で、(24)は口径14.8cm、器高3.7cm、(25)は口径12.2cm、器高3.65cmを測る。

朝鮮製 (26)はソバ茶碗で、口径16.8cm、器高2.6cm、乳白色の色調である。

華南彩釉 (27)は平面が八角形をなす小形の皿。口径6.5cm、器高1.25cm。高台内を除く内外面に青色の釉がかかるが、外面は剝離している部分が多い。高台内に方形枠と一文字の印刻あり。

金属製品 (29)は木瓜形の引手金具で、縦6.2cm、横5.0cm、奥行1.3cm。(30～32)は鉄釘で、錆び膨れしておらず保存状態が良い3点を図示した。頭部はいずれも巻頭タイプである。(30)は先端がわずかに欠損し残存長10.3cmで、首部断面は0.5×0.35cm。(31)は長さ6.4cm、首部断面0.35×0.3cm。(32)は長さ4.3cm、首部断面0.35×0.2cm。頭部の巻きの方向が左右で互い違いにねじり回されている。

(櫛部正典)

石製品 今回の調査地区は寺院跡ということで、出土した石製品のほとんどが石仏・石塔であった。それ以外の石製品で特筆すべきものとしては、「七代上人真慶」と彫られた(33)の笏谷石製の盤がある。口径25.0cm、高さ16.3cmを測る足付きの石盤で、内面にはノミ痕を残すが外面は丁寧に磨かれ「南無阿弥陀仏、七代上人真慶、南無阿弥陀仏」の文字が彫られている。銘文から西山光照寺七代住持に關係する遺物と考えられるが、「真慶」といえば、明応4年(1495)に真盛上人が亡くなったとの知らせを聞き越前から上洛した府中引接寺住僧として真慶・真遍の名が『真盛上人往生伝記』にみえる。戦国期の天台宗真盛派の住持は、岡ノ西光寺や引接寺、西山光照寺、盛源寺等の同宗派寺院を数年交代で回って住持を務める輪番体制であったと考えられるが、西山光照寺の住持については、天文24年(1555)の年紀とともに「当寺五代真重上人」の銘がある石碑があり、「七代上人真慶」が真重上人より後代の住持であるならば、『真盛上人往生伝記』に記される真慶とは年代的に隔たりが大きく、同名ながら別人の可能性が高い。(93)は大型の盤で、高さ16.0cmを測る。縁には導水口のような溝が彫られているので、水盤として利用したものと推定される。

七代上人真慶

石仏・石塔 西山光照寺跡の石仏・石塔については、これまでに一乗谷石造遺物予備調査(昭和47～49年実施)、第86・87・90次発掘調査において調査・報告されてきた。¹⁾

1) 西山光照寺の石造物については、『一乗谷石造遺物調査報告書I』1975年、資料館発掘調査・整備事業概報『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡1995』、『同1996』を参照。

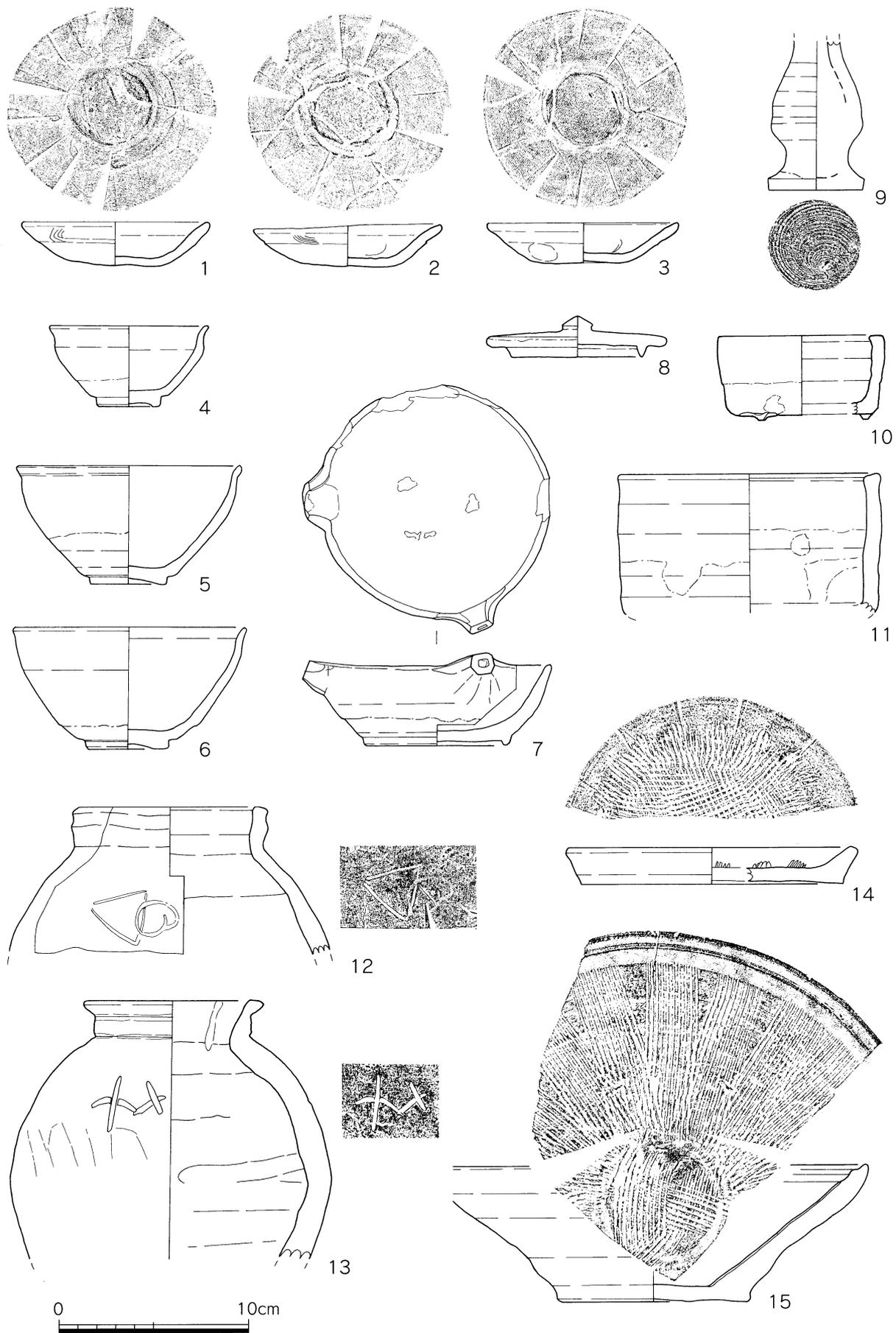
彩色の残る 石造物

寺域内には約40体の大型石仏のほか、西側谷筋・山裾に墓地跡があり、多くの石仏・石塔が地表に露出していたため、これまではこれらの調査・報告が主体であった。今回の発掘調査では、調査区からの地表採取されたもの以外に包含層や下層遺構面からの出土遺物も含まれ、何らかの理由で土に埋まってしまったため、銘文の部分に施された朱・金の彩色が、造立当初のまま色鮮やかに残るものが多く見られた。

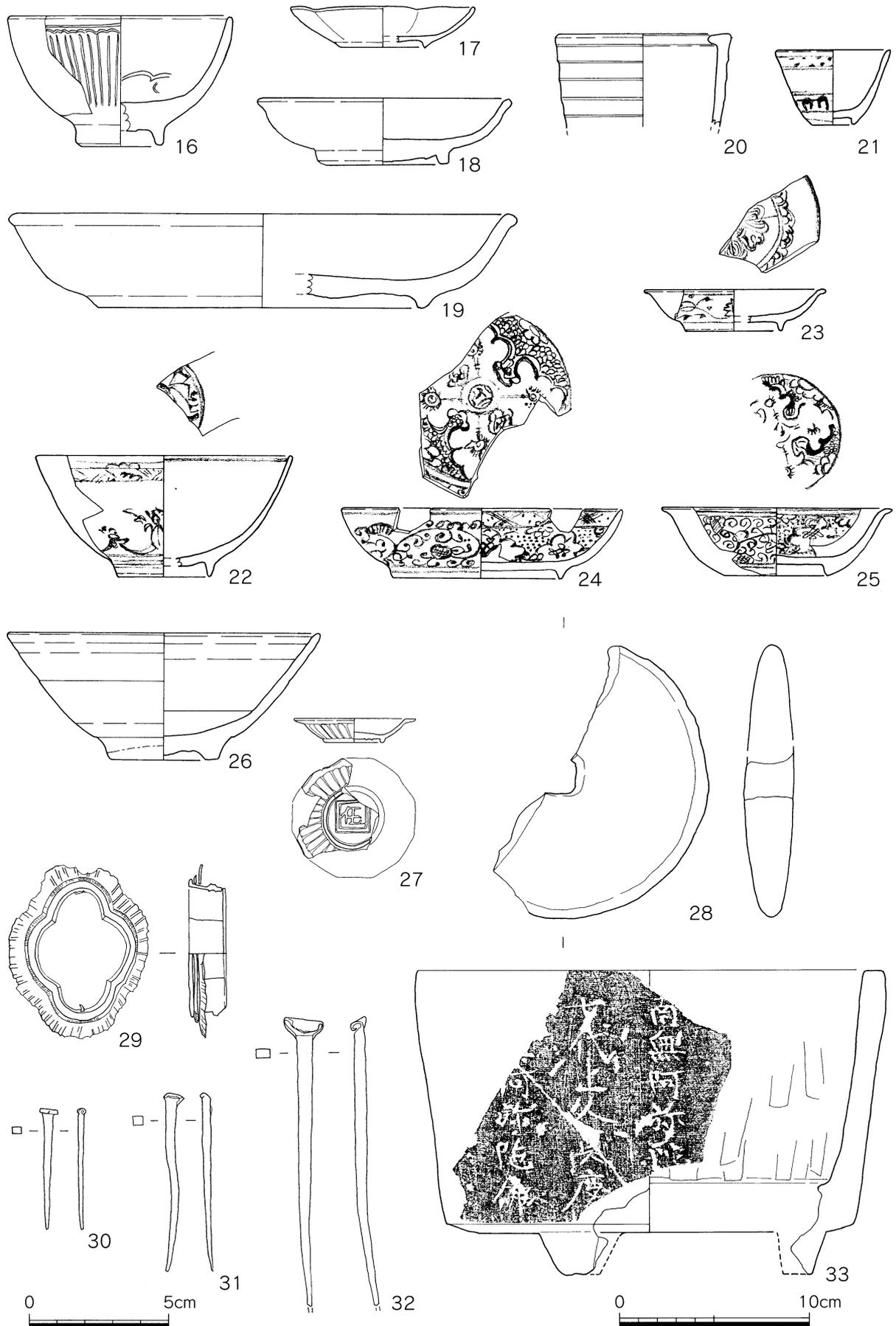
(34)は宝篋印塔の相輪で、宝珠等の部分に梵字が彫られている。組み合わせる凸部も含めると35.9cmである。(35)も組み合わせ式の石塔の宝珠である。石塔は一石五輪塔が多く出土したが、完形の状態で出土したものはなかった。(36～45)は一石五輪塔の空・風輪の部分で、大型のものとしては(44)の空輪が直径22.0cmを測る。(46)は「妙法蓮華経」の文字が彫られる一石五輪塔で火・水輪の部分のみ出土した。(52)は一石五輪塔の地輪だが、高さ14.3cm、幅10.0cmと小型である。(54・58・65)のように地輪がほぼ正方形に近いタイプのは底部の削りが浅く、(53・61～63)のような長方形の地輪は、比較的底部の削りが深く施されているものが多い。(64)の地輪は高さ26.6cm、幅18.6cmを測り、70cm以上の高さの五輪塔であったと考えられる。(39・59・67)は梵字に月輪の彫刻が施されている。(69～78)は石塔の台座で縁に反花が彫られている。(72)は高さ9.8cm、幅32.2cmを測り、上面は一辺19.5cmで、このような台座の上に一石五輪塔が据えられていたと考えられる。反花は単弁で表現されるものと、(78)のように複弁のものがある。(78)は高さ26.4cmの大型の台座である。(50・51)は地藏菩薩の石仏で、板碑では(88～92)のように五輪塔を線刻したものが多い。(79・80・83・84)等も板碑の一部と考えられるが、小破片のため石龕等の一部の可能性も考えられる。(81・82)は「南無阿弥陀仏」の名号に、朱漆が塗られ金箔が貼られている石造物であるが、全体の形や種類は不明である。(81)は表面を磨いて調整しており、側面にも銘文が彫られている。(82)は内部が削られ、側面には蓮華座が浮彫りされている。(85・86)は宝篋印塔等の石塔の基礎部分である。格狭間の中に蓮華座が彫られている。(87)も同じく石塔の基礎部の板材と考えられる。(94～97)は石龕の部材と考えられる。(94)は舟形光背の線刻のみで像種不明だが、(95)は阿弥陀如来が彫られている側板である。このような石板を組み合わせ、(96・97)のような屋根材をのせていたと考えられる。

石塔・石仏の銘文については、銘文一覧表(表3)にまとめた。銘文から造立年の分かるものは17点で、永正6年(1509)の五輪塔(60)が一番古い。これまで西山光照寺の石造物は、地表に露出しているものを中心とする調査結果として、天文9年(1540)に造立のピークがみられた。しかし、今回の調査ではこれまで少なかった永正年間に造立された石造物の割合が多く、彩色の残るものも含まれることから寺の造営や墓地の造成などの諸事情により埋没した石造物であった可能性が考えられる。

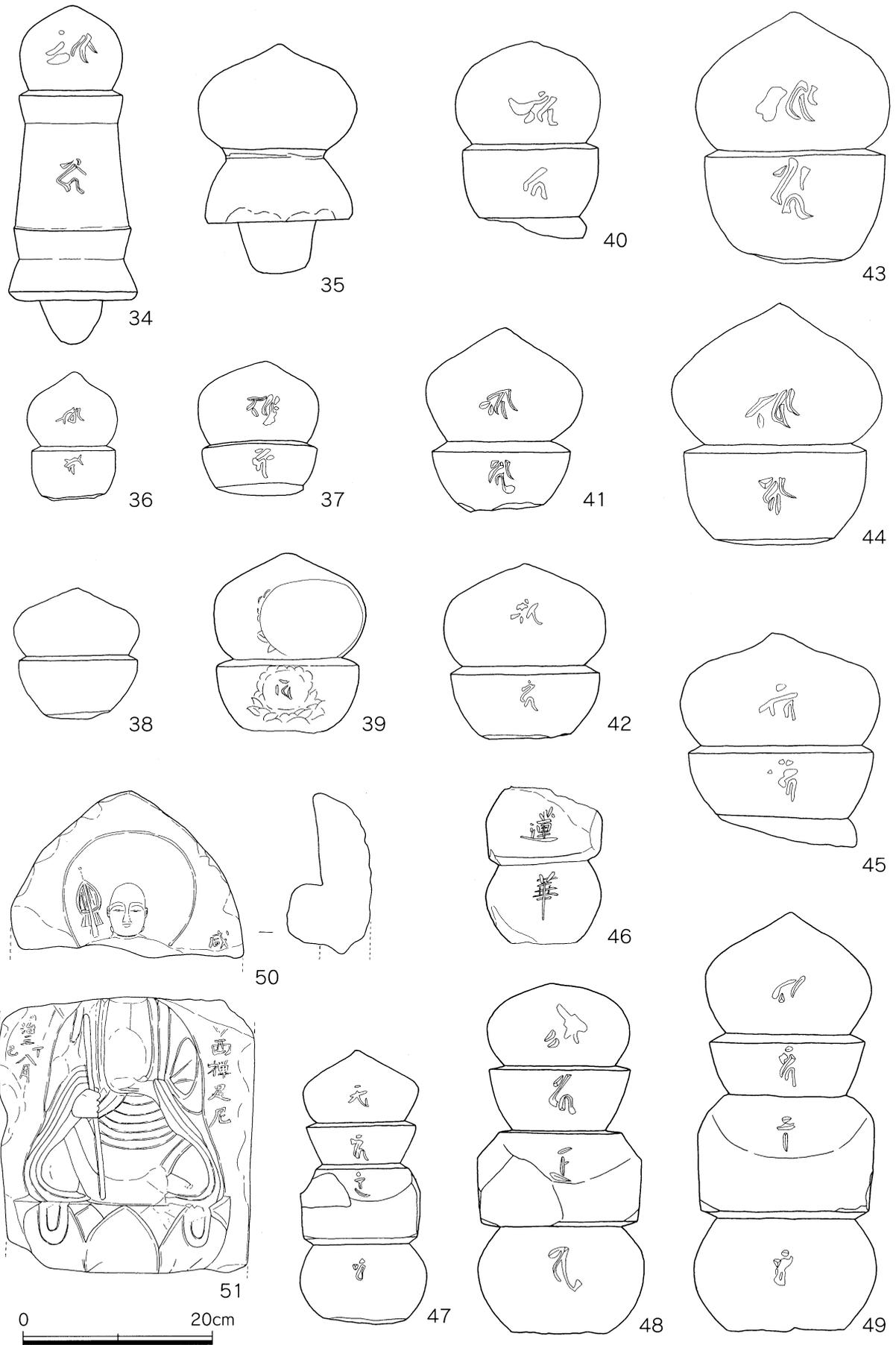
(宮永一美)



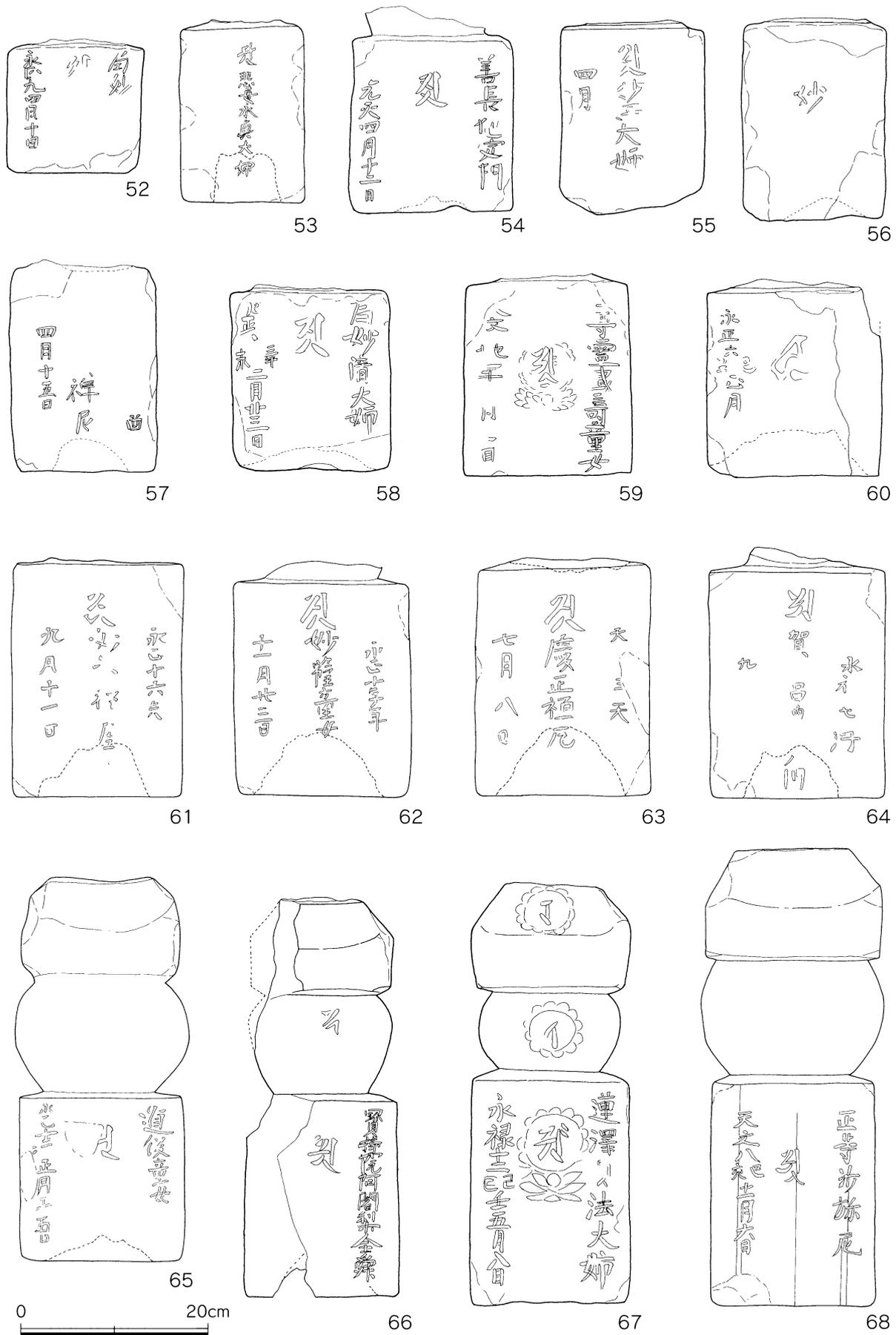
第7図 第132次発掘調査出土遺物(S=1/3)



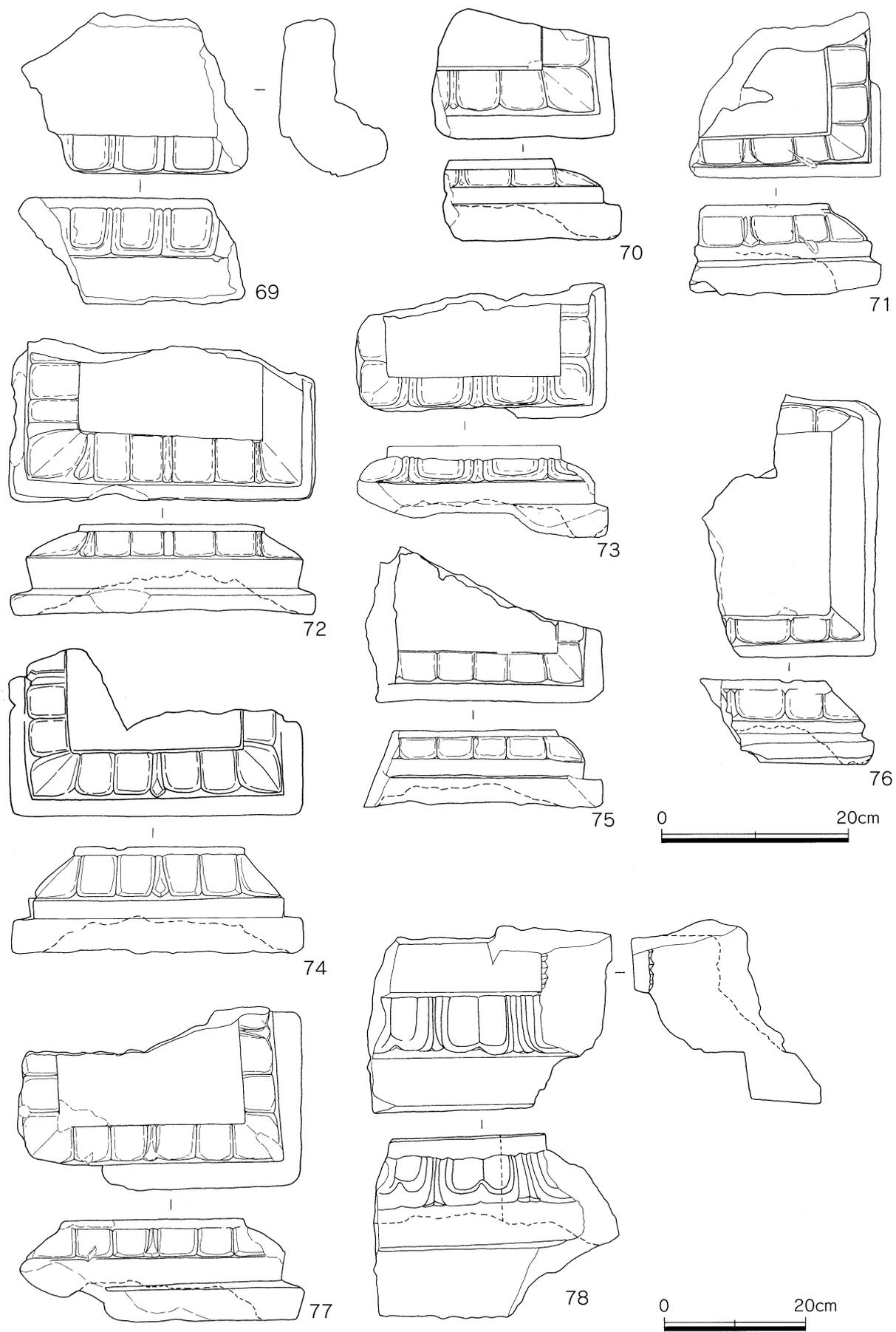
第8図 第132次発掘調査出土遺物(29~32はS=1/2、その他1/3)



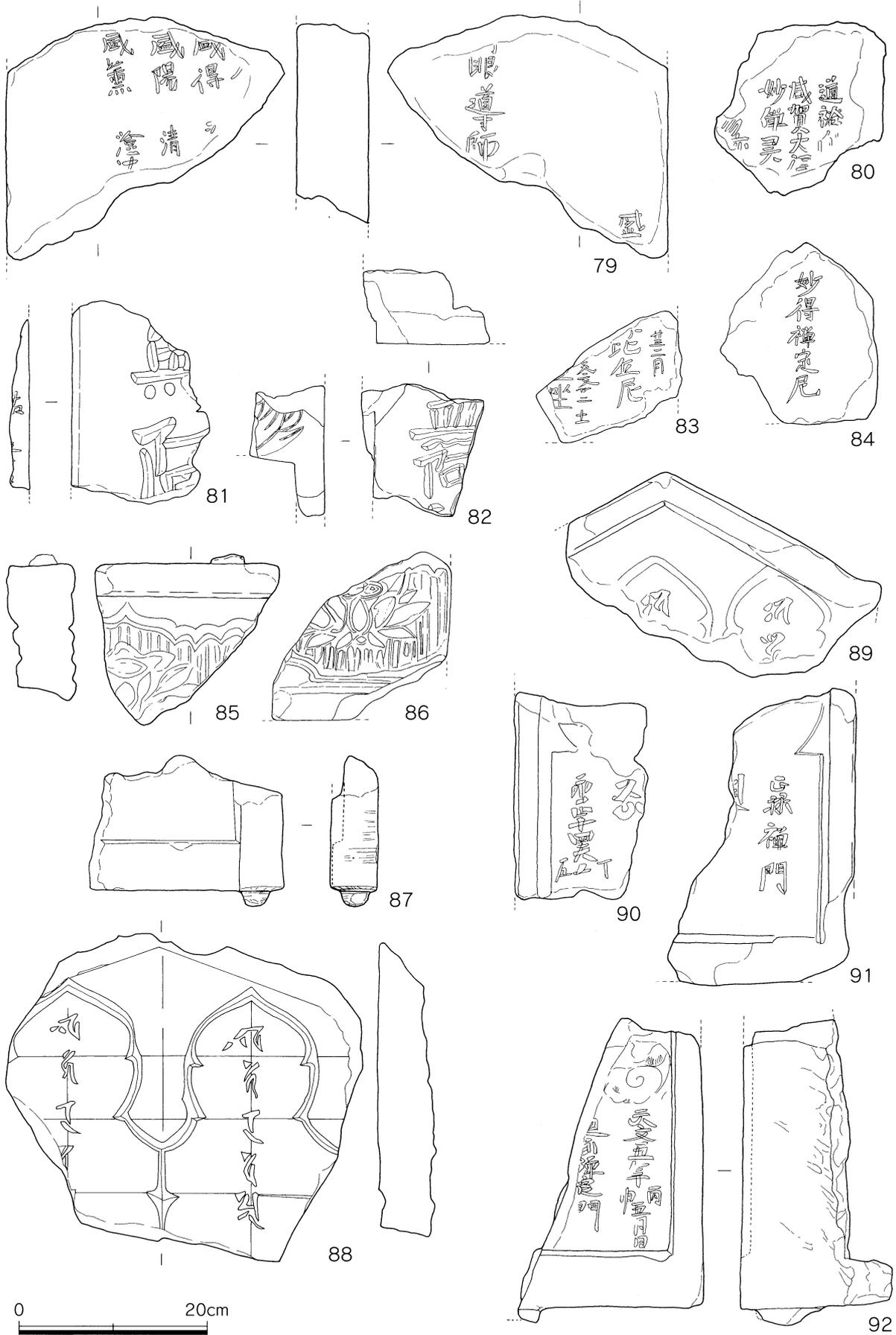
第9図 第132次発掘調査出土遺物(石造物、S=1/6)



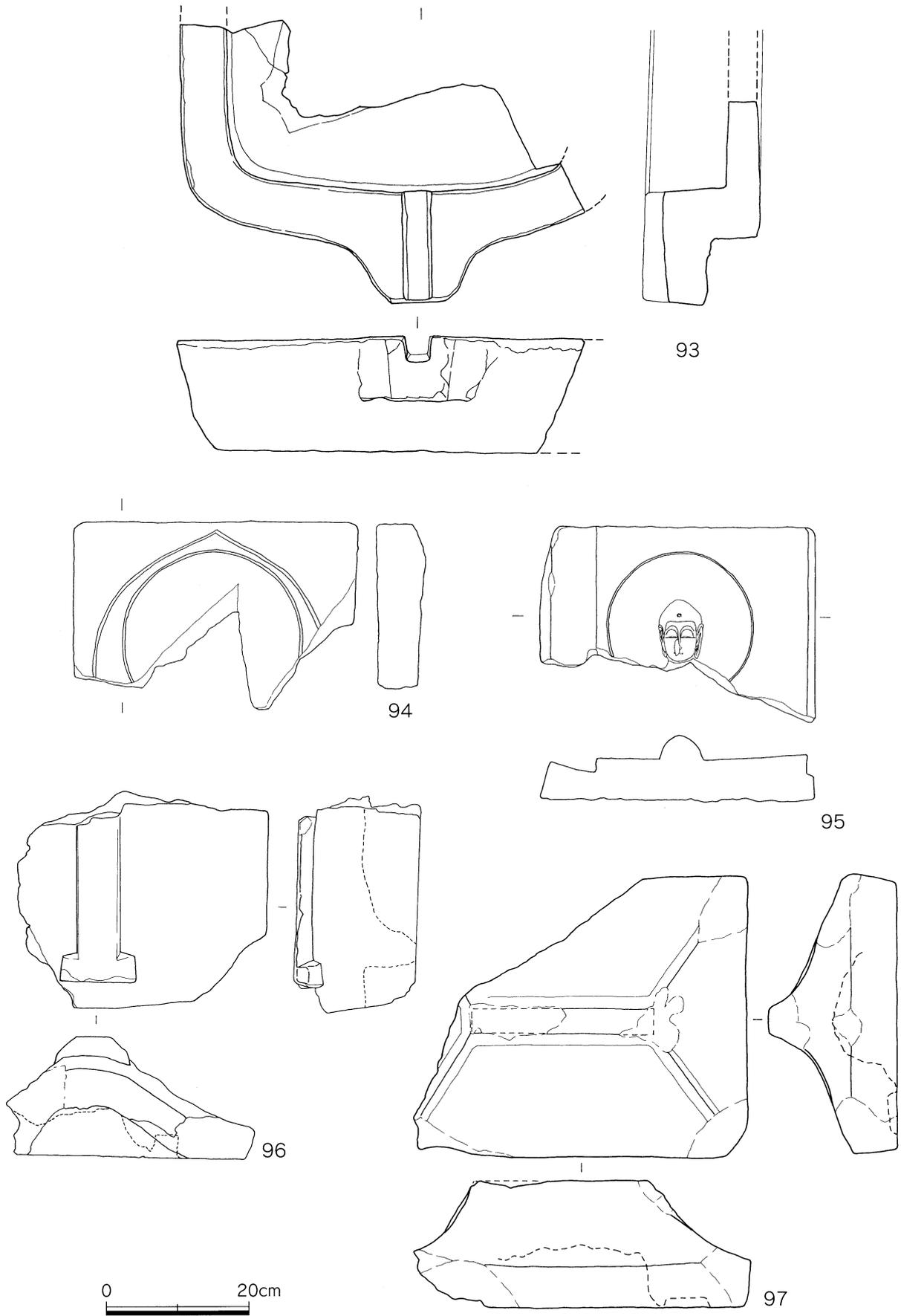
第10図 第132次発掘調査出土遺物(石造物) (S=1/6)



第11図 第132次発掘調査出土遺物(石造物、78はS=1/8、その他1/6)



第12図 第132次発掘調査出土遺物(石造物) (S=1/6)



第13図 第132次発掘調査出土遺物(石造物等、S=1/8)

表3 第132次発掘調査出土石仏・石塔銘文一覧

石造物番号	種別	部位	総高	銘文	西暦	備考	図版
132-2	一石	地	18.8	善長禪定門／□元天四月十二日			54
132-4	一石	地	21.3	尊靈盛壽童女／天文八己亥年□月廿□日	1539	梵字に月輪	59
132-11	一石	地	19.5]師／永正六己巳正月廿四日	1509	金彩色残る	60
132-19	板碑		14.8	天文十八年	1549		
132-20	石仏		19.6	妙全童女			
132-21	板碑		10.6]廿三月十[/]比丘尼／]天文廿二十一月[/]坐	1553		83
132-23	板碑		32.3	天文五年丙申五月日／□□禪定門	1536		92
132-25	板碑		16.0	□賢禪[
132-26	石仏		10.5]精華[
132-33	板碑		18.7]西[
132-39	一石	地	19.3	為妙清大姉／永正八辛未二月廿三日	1511		58
132-43	一石	地	19.5	妙西大姉／四月□日			55
132-48	一石	火水地	44.5	蓮澤□法大姉／永祿十二己巳閏五月八日	1569	梵字に月輪	67
132-51	石仏		18.5]四日			
132-56	板碑		17.0	為妙[/ 明忘[
132-57	板碑		21.4	道全禪[
132-65	一石	地	19.6	悲母永貞大姉			53
132-73	板碑		21.0]盛得[/]盛陽、清[/]盛薫、澄[(裏面)盛[/]眼道師[両面に銘文あり	79
132-76	地藏		29.4	妙西禪定尼／弘治三丁巳八月□日	1557		51
132-79	組合	地	20.3]禪定□			
132-82	石塔		09.6]二月廿[小片	
132-83	一石	火水地	41.5	寶持院阿闍梨全舜			66
132-93	地藏		21.6]女			
132-104	一石	地	14.3	為妙[/ 永正九四月十日	1512		52
132-117	一石	地	22.8	□文[]西／□讚禪尼／四月十五日			57
132-118	一石	地	25.4	永正十六天□／妙□禪尼／九月十一日	1519	119と接合	61
132-126	不明	地	10.4]□□[/]□□[/]月廿[摩耗激しく判読不可	
132-154	板碑		22.1	永正十四天丁丑十[1517		90
132-159	一石	火水地	48.8	正等沙弥尼／天文八己亥十一月六日	1539		68
132-163	一石	地	25.3	大永三天癸未／慶正禪尼／七月八日	1523		63
132-165	一石	地	26.6	永祿七甲子年／智□昌由禪定門／□□九[1564		64
132-191	板碑		18.0]禪尼／]月廿八日			
132-268	石仏		17.8]盛[50
132-287	石仏		11.3	□盛禪定□		小片	
132-318	板碑		23.2	[]門／□□禪尼		大型	
132-319	一石	火水地	41.9	道俊童女／永正十二乙亥正月廿五日	1515		65
132-320	板碑		18.0	道祐禪[/ 盛賀大禪[/ 妙禪靈/[]			80
132-321	板碑		19.3	妙得禪定尼			84
132-322	板碑		14.2]法界[/]法界[/]法界[小片 側面なし	
132-323	板碑		11.8	妙□□[小片 側面なし	
132-324	板碑		32.0	正祿禪門			91
132-331	不明		21.6]無阿[朱・金彩色残る、左側面にも朱塗り文字あり	81
132-339	一石	地	25.0	永正十三年／妙薩童女／十一月廿三日	1516		62
132-340	石仏		29.0	良珠[
132-357	石仏		18.5	弘治三五月[1557	金彩色残る	
132-358	不明		14.0]無阿弥[文字に朱・金彩色残る	82

※総高は残存長とした。銘文の表記方法については、石造物の欠損している部分が上部欠のものは]、下部欠のものは [の記号で、文字数の分かるものは□で表した。改行は / で表した。

3. 第133次発掘調査（第14・15図、PL.13）

本調査は個人宅の増改築に伴う現状変更に係る発掘調査である。この個人宅は平成元年（1989）に新築に伴う事前調査（第66次調査）を面積180㎡で行い、礎石建物2棟、石列1列、井戸2基などを検出し、遺物が10,450点出土している。

今回の発掘調査区は第66次発掘調査の西側に位置し、調査区の規模は約40㎡である。調査では、2時期の遺構面を検出した。

地表より約65cm掘削した地点で第1面の遺構を検出した。第1面では、炭化物を多量に含む土坑2基とピットを7基確認した。これらのピットが建物跡であるかは明確に確認できなかったがSP6471とSP6475、SP6475とSP6473の間隔は約1.8～1.9mであり、配置等から考察すると建物の礎石が抜けた跡として考えることもできる。

出土遺物のほとんどは室町時代末の資料と考えられる。第1面の包含層からは細かな破片が大多数であるが白磁端反皿や鉄釉香炉、灯明皿を含む多量の土師質片などが出土した。

第1面で遺構が確認されなかった調査区北東角に約2m×約0.6mのトレンチを設定し、掘削したところ約20cm下層で第2面を確認した。この遺構面では石の平坦な面を上面に配置した石敷の遺構を検出することができた。トレンチの掘削範囲が限られることから、この遺構の性格は不明である。また、土層観察から第2面を暗褐色粘質土や黄褐色粘質土などで埋め立て、整地後に第1面を構築していることを確認した。

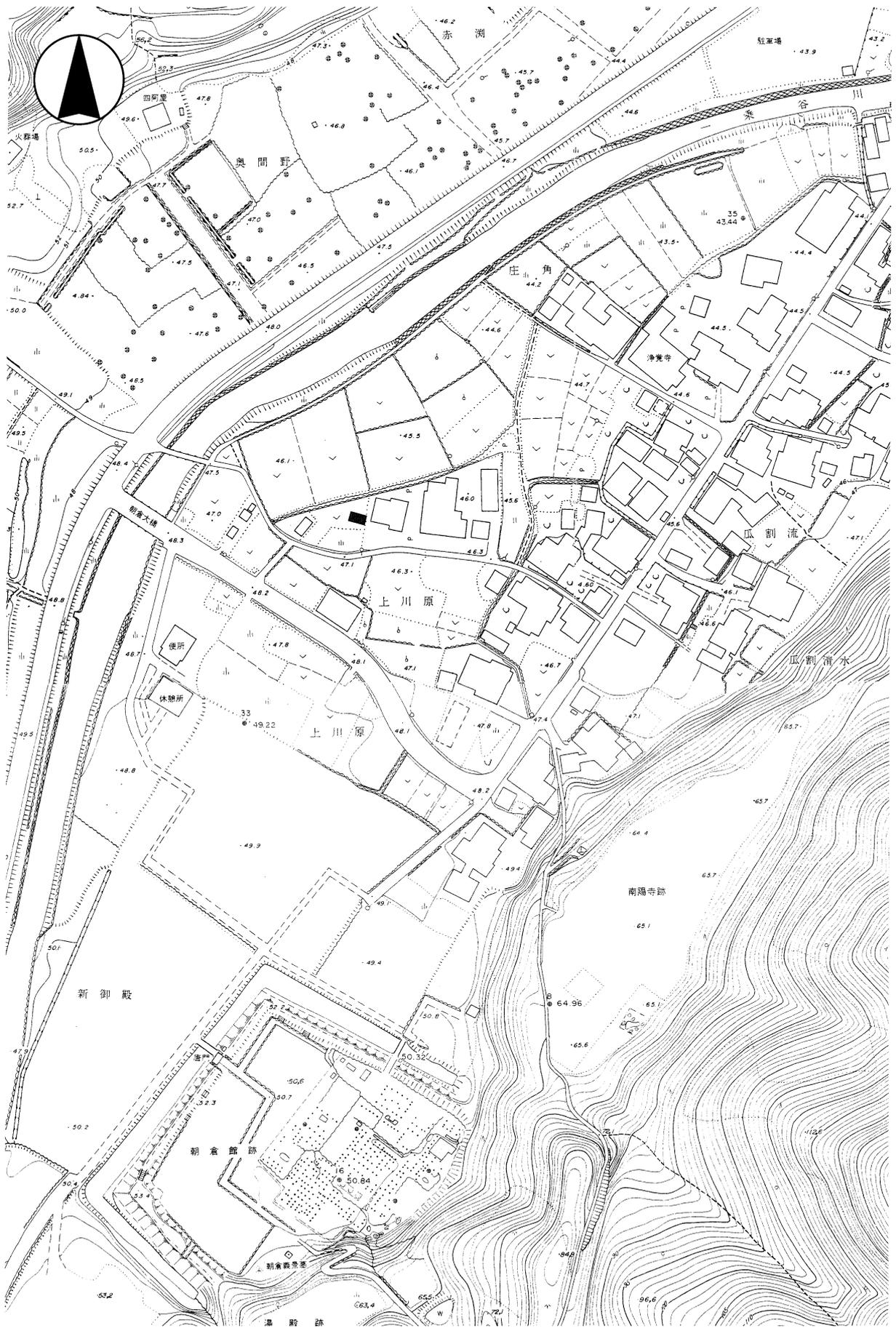
第133次調査では遺物が1,259点出土したが、その内第2面を検出したトレンチからは148点の出土量があった。出土品には完形の土師質皿や灯明皿の破片、青磁碗の破片、笏谷石と呼称される緑色凝灰岩製の白などの遺物が存在する。

調査の結果、隣接する第66次調査区と同様に2時期の遺構面を検出した。今後、調査した周辺の小規模の調査区を精査し、層序や遺構の関係性を検討する必要がある。

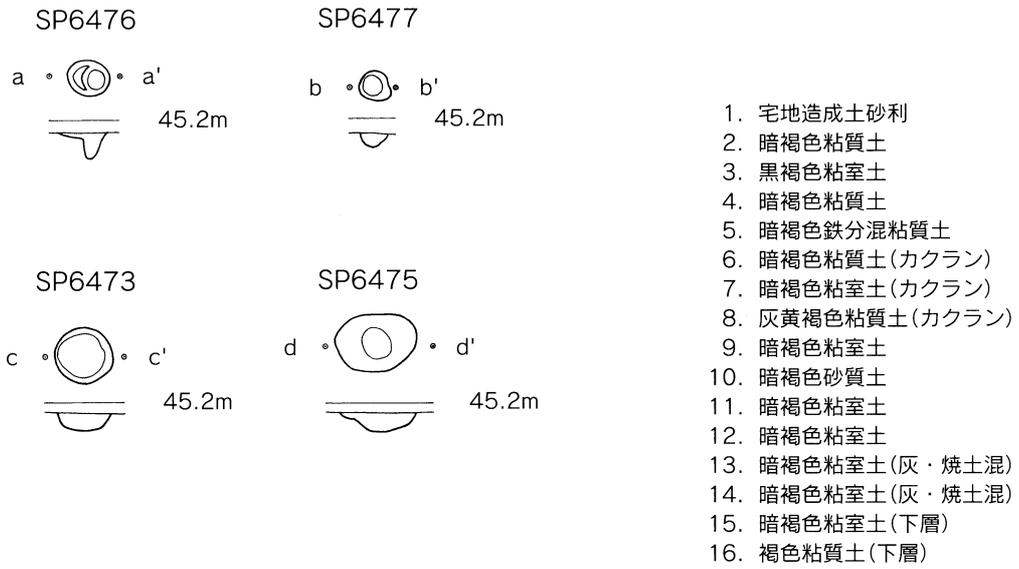
（川越光洋）

表4 第133次発掘調査出土遺物一覧

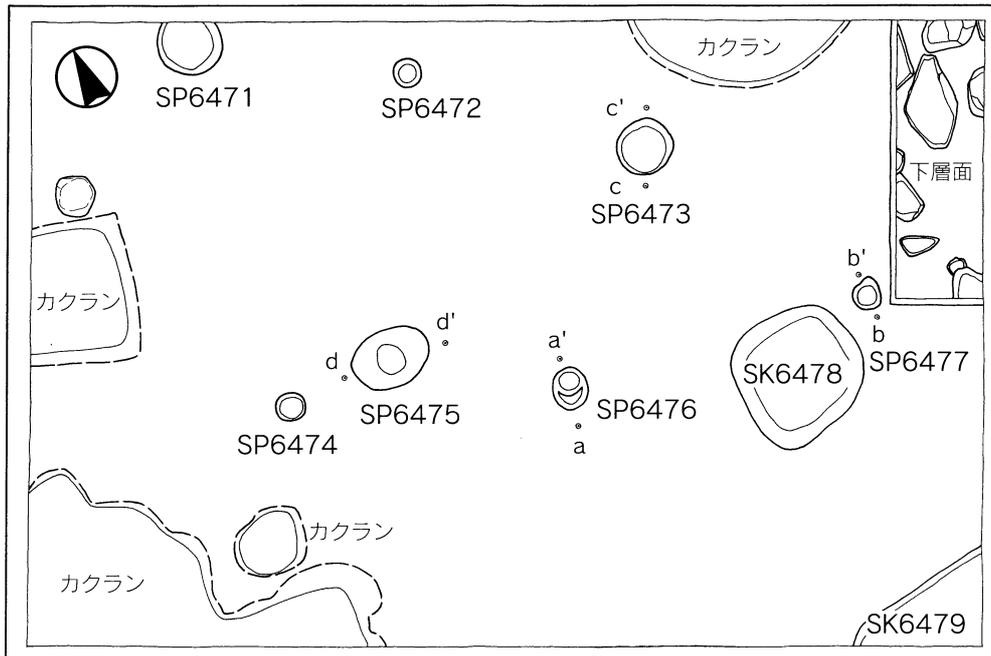
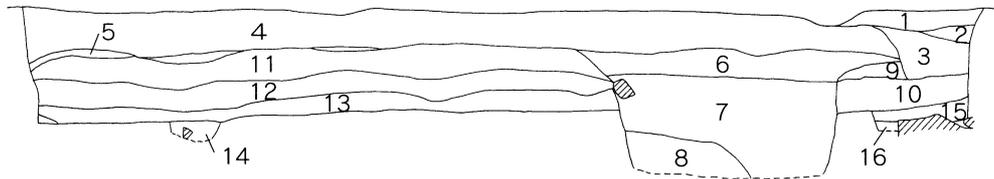
器種	点数	器種	点数	器種	点数			
越前焼	甕	93	青磁	碗	6	金属製品	釘	20
	壺	7		皿	5		銅銭	2
	鉢	7		香炉	1		その他	7
	播鉢	18		鉢	2	石製品	砥石	1
土師質	皿	969	白磁	皿	35		バンドコ	7
	土釜	2	染付	碗	9		白	1
	土鈴	1		皿	16	その他	5	
	香炉	1	中国製	壺	1	その他	壁土	2
鉄釉	碗	6	朝鮮製	壺	2		合計	1,259
	壺	1	近世・近代陶磁器	15				
	香炉	2						
灰釉	碗	1						
	皿	10						
	香炉	1						
瓦質	壺	3						



第14図 第133次発掘調査位置図



46.0m



第15図 第133次発掘調査遺構全体図・土層断面図(S=1/50)

4. 環境整備（第16～18図、PL.14・15）

環境整備（一般）

平成22年度は、第124次発掘調査区（米津地係）にて整備工事を実施した。本対象地は諏訪館跡庭園の麓、町並立体復原地区から朝倉館跡へ向かう園路沿いに位置し、見学者が多く通行する場所である。よって、本対象地は遺跡の景観形成上重要な場所の一つといえ、二か年で周辺一帯の景観を整えることとした。今年度は発掘調査地の整備を中心に行い、平成23年度は周辺の整備を実施する。工事の実施にあたっては、昨年度に引き続き、福井土木事務所の協力を得た。

第124次調査区（米津）整備工事

第124次調査区約3,700㎡にて整備工事を実施した。発掘調査では、土製文様型や炉跡等の出土から金工師の屋敷と推測するに至ったが、遺構は後世の削平を受け、建物跡等の復元整備は難しい状況であった。よって、本工事では盛土工で遺構を保護するとともに屋敷割を表示し、排水工で適切に雨水の処理を行い、張芝工による修景を行うこととした。なお、本整備地は平成21年度開催の第60回全国植樹祭会場として使用され、一部暗渠排水工と山砂による盛土が実施されていた。

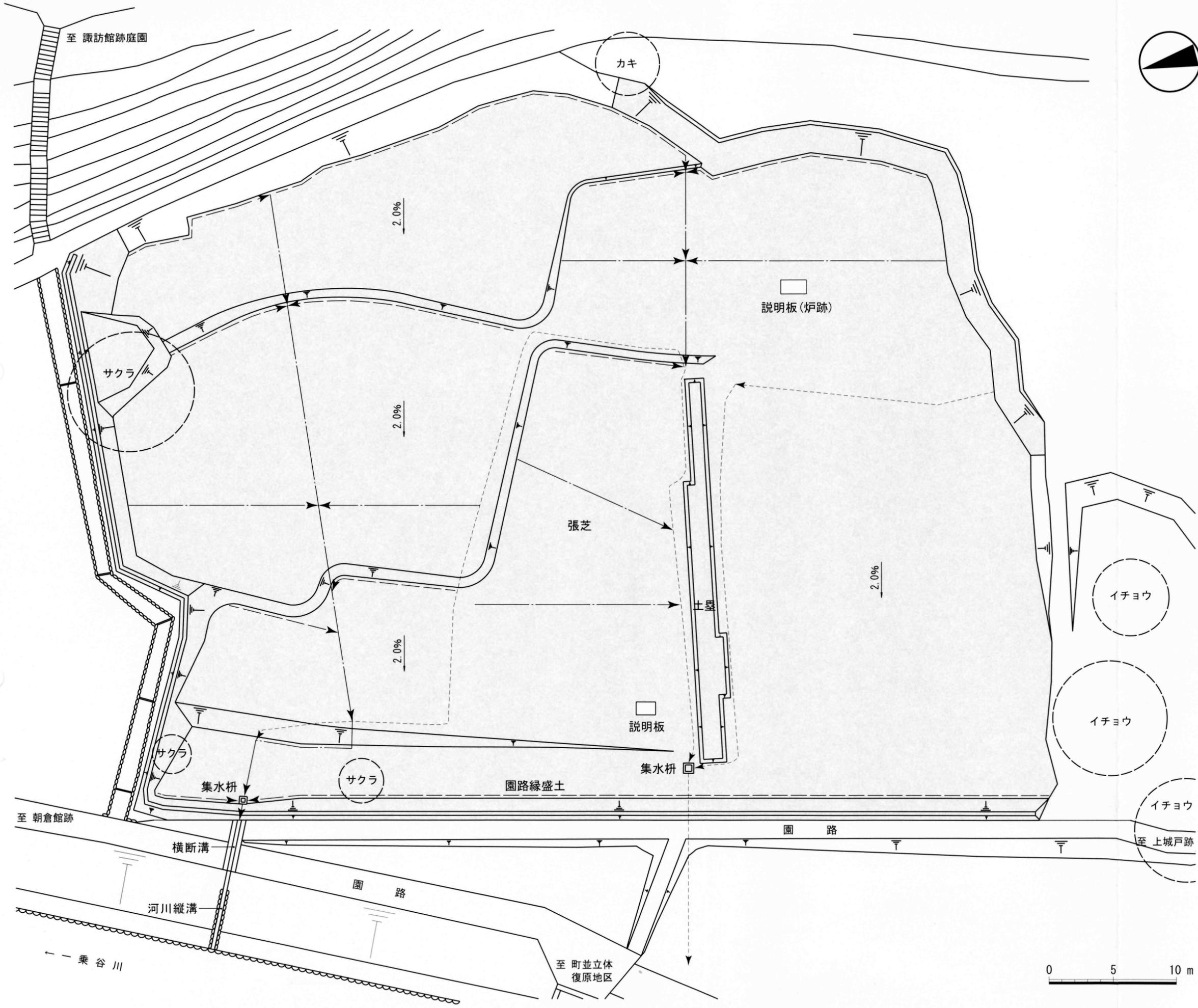
盛土工 盛土工では、遺構保護の上、調査結果による屋敷地の高低差に合わせて地盤高を設定し、一部植樹祭時の盛土すき取りを行いながら、地盤を造成した。遺構の石垣や土塁は、イノシシ等による転石防止のため、緩傾斜の法面整形により保護し、また、山側の石積についても崩壊防止を目的とし、安定勾配の斜面を造成した。敷地西側の園路際では、高低差が生じたため、車椅子の転落防止や園路から整備地へ雨水が流れ込むことを防ぐため、園路縁を一段高く盛土した。なお、敷地全体として、排水性を考慮し、川側へ向け2%の水勾配を設定した。

排水工 排水工では、雨水や湧水処理を目的として暗渠排水管を敷設し、川側2か所の集水桝から排水溝で一乗谷川へ排水した。暗渠排水管はソダ状集束管φ10cmを用い、植樹祭時の暗渠管に加え、主に敷地の水勾配に対し直角に敷設した。なお、特に水を受ける法尻はフィルター材を露出させた。川への排水はU字型側溝を用いて速やかに排水し、側溝脇には洗掘防止の10cm幅のコンクリートを打設し、景観に配慮して小石を配した。園路下を通る排水溝には、蓋の両サイドにスリットを設け、園路を流れる雨水の排水も併せて行えるようにした。

張芝工 盛土工と排水工後、周囲の景観と調和を図るため、張芝工を実施した。また、既存のサクラについて、見学者の妨げにならないよう枝の剪定を行い、切口には防腐剤を塗布した。

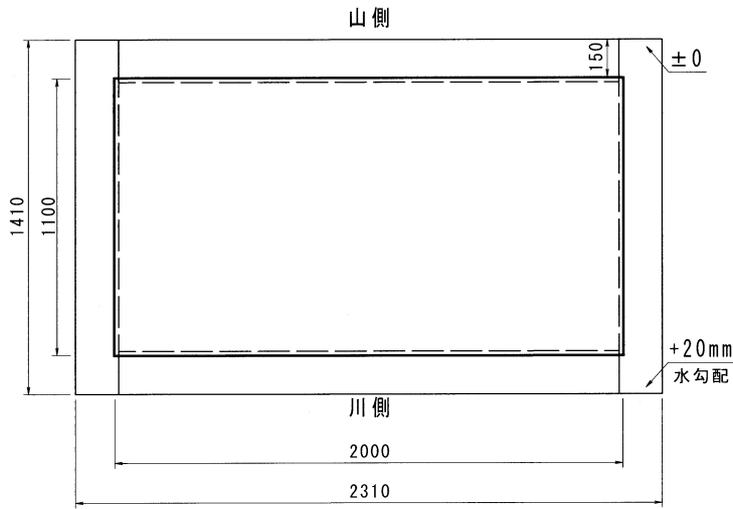
説明板設置工 説明板設置工では、発掘調査により得られた敷地の性格や遺物などの成果を示す説明板2基を設置した。園路近くには調査の概要を示した平置型の説明板を設置し、また、特徴的な遺構である炉跡の検出箇所には、発掘時の写真を原寸大で表示した。平置型の説明板ではウレタン樹脂シートを使用し、炉跡の説明板ではステンレスホーローを使用した。なお、炉跡の説明板は幅約2.3m×奥行約1.4mと大型であるが、人の重量にも耐えられるよう、説明板の裏をステンレス製角型パイプで補強した。遺構の原寸大写真を用いた説明板は、本遺跡において初の試みであり、現在の技術では露出が困難である炉跡の公開方法の一つとして設置した。

（今出瑞穂）

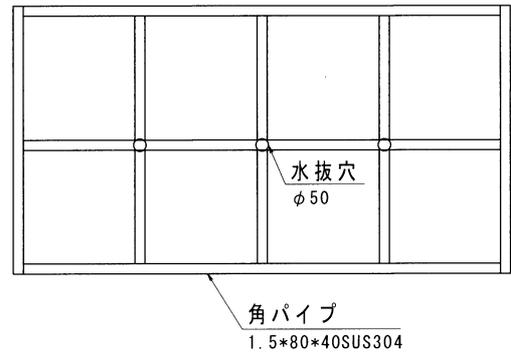


	暗渠排水管 (フィルター材埋戻し)
	暗渠排水管 (フィルター材露出)
	既設暗渠排水管
	張芝
	既存木

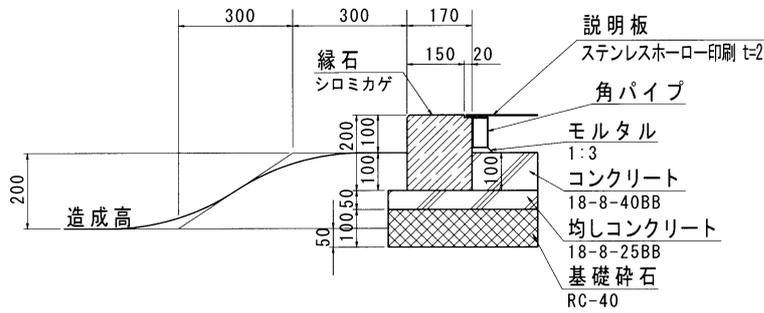
第16図 第124次調査区(米津)整備工事平面図(S=1/300)



平面図 S=1/30

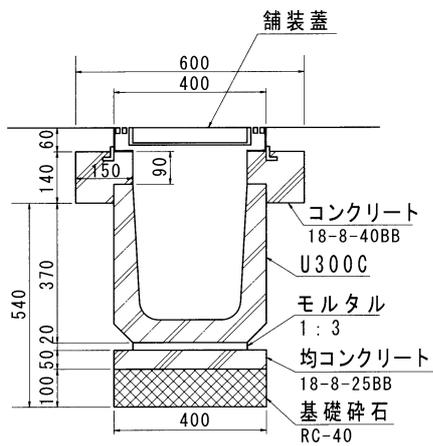


角パイプ配置平面図 S=1/30

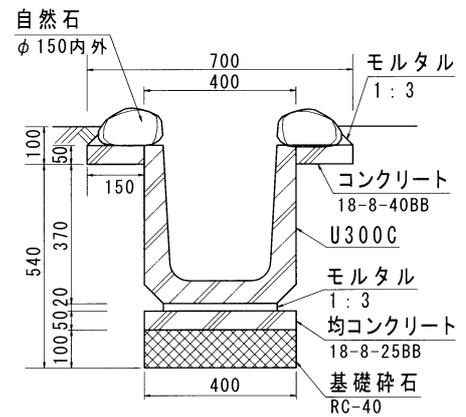
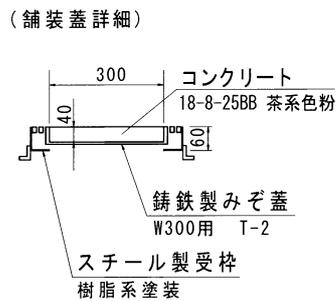


断面図 S=1/20

第17図 説明板(炉跡) 詳細図



横断溝 S=1/20



河川縦溝 S=1/20

第18図 河川排水工詳細図



SD6421・SZ6422(西より)



SD6421・SZ6422・SV6424・SB6425(西より)



SD6421・SZ6422石造物出土状況(西より)



SX6427(北より)



SB6426・SB6429・SX6430(南より)



SB6426・SB6429・SX6430と焼土面(南より)



上段東半(北より)



SX6440土師質皿出土状況(南より)



上段西半(北より)



SX6442・SD6443・SD6444(北東より)



SK6434石造物出土状況(東より)



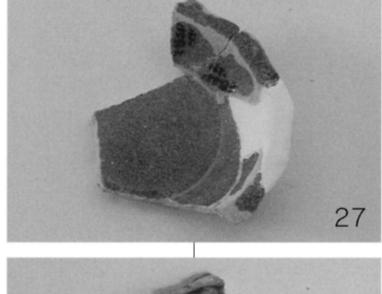
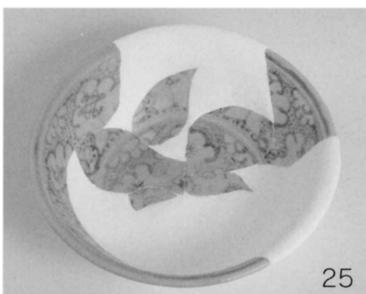
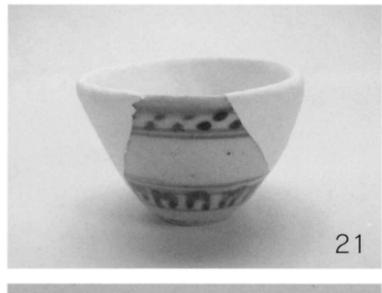
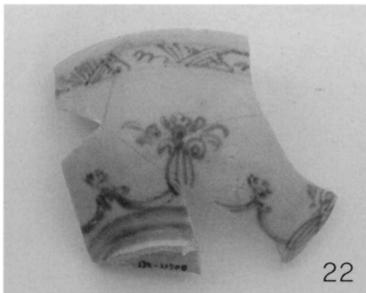
SX6446・SD6448・SD6449(北東より)

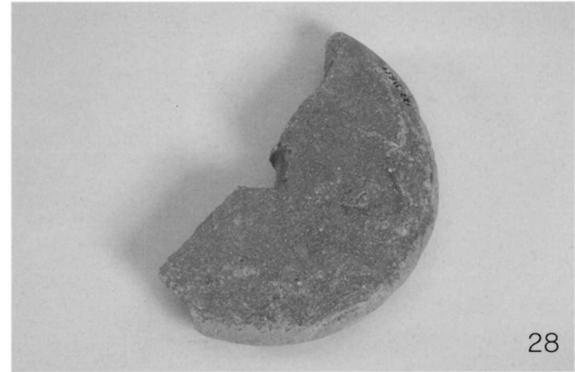
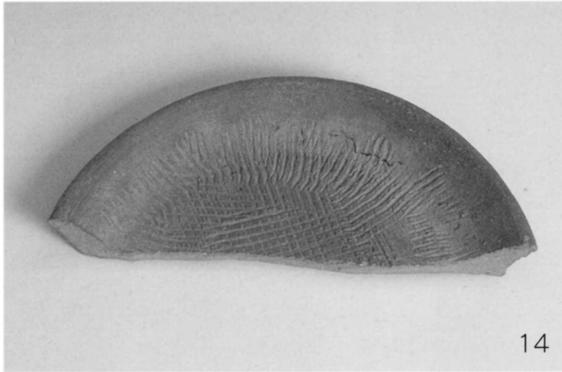


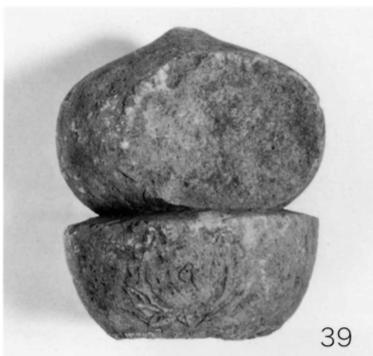
SV6447・SA6452・SZ6453(北より)



SD6450・SA6451・SX6452・SZ6453(南より)











79



91



92



93



95



96



97





第133次発掘調査全景(東より)



第133次調査区東側トレンチ(東より)



整備地全景(南より)



整備地全景(諏訪館跡庭園より)



土塁(西より)



説明板(西より)



説明板(炉跡)(東より)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 41
副書名	平成22年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番号	41
編集者名	櫛部 正典
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成24年3月9日

調査地区	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第132次調査	福井市安波賀中島町字赤旗	18210	史-31	36° 0' 45"	136° 17' 47"	100525 } 110315	1,500㎡	環境整備に伴う発掘調査
第133次調査	福井市城戸ノ内町字庄角	18210	史-31	36° 0' 5"	136° 17' 44"	100414 } 100514	40㎡	現状変更に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第132次調査	寺院	室町・戦国 (15・16世紀)	建物3、石垣2、溝6、石敷1、井戸1、暗渠3、石列3、土塁状遺構1、土師皿一括出土ピット1	越前焼、土師質皿、瀬戸・美濃焼、青磁、染付、朝鮮製陶磁器、華南彩釉陶器、薬研、引手金具、石盤、石仏、石塔	火災による焼土面、大規模な建物跡、石垣の検出と、彩色・銘文の残る石仏・石塔の出土
第133次調査		室町・戦国 (15・16世紀)	土坑2、ピット7	越前焼、土師質皿、瀬戸・美濃焼、青磁、白磁、石臼	2面の遺構面を検出

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡 41

平成22年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成24年3月9日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 足羽印刷株式会社